連載・雑草のよもやま《第2回》

北海道植物図鑑，原松次先生の東京府立園藝学校卒業論文

公益財団法人
日本植物調節剤研究協会
技術顧問
森田　弘彦

北海道の植物相は本州以南でのそれとかなり異なる。雑草に関しても，例えば畑雑草のオヒシバやホトケノザは珍しい植物であり，水稲用除草剤の適用性試験ではミズガヤツリやクログワイは評価の対象外で，また，コナギの欄はミズアオイと書き替えられる（図 -1）。

筆者は，1979 年ごろに札幌市近郊の水田で「コナギ」の幼植物を採集して育てたところ，長い花序に青い花を着けたので，これはミズアオイであった。その後，石狩地方南部の水田に生育し，北海道での水稲用除草剤の効果評価に供される「コナギ」はミズアオイであることを確かめたが，北海道における本物のコナギの分布について確かな情報がなかった。その頃に，国立科学博物館の奥山春季先生監修の「植物採集ニュース」などに胆振地方を中心に北海道の植物情報を精力的に発信しておられた，文化女子大学室蘭短期大学植物学教授の原松次先生に知己を得て，先生の「北海道いぶり地方植物目録（1979）」にコナギの記載があることを知った。フラサバソウ，オオブタクサなどの帰化植物や，カゼクサ，ウリカワなど北海道に稀な雑草の分布情報を多数持ち，「北海道植物図鑑　上（1981　図 -2）」に「全国に分布し，道内では石狩―胆振以南のようである。」として，1997 年 7 月に北海道伊達市で撮影したコナギの画像を掲載された。このコナギについて，1981 年の秋に室蘭市の文化女子短期大学に原先生をお訪ねしたところ，伊達市の現地水田までご案内いただき，種々のご教示を頂いた。コナギは，イネ収穫後の水田で成熟した果実を着けた花茎を地に伏せていた。翌年，伊達市産のコナギと埼玉県鴻巣市の農事試験場水田産のコナギを育てたところ，後者は秋になっても花を着けなかったが，前者は開花した（図 -3）。伊達市のコナギは，夏の日長の長い北海道でも開花して種子を残す性質を持つことが知られた。

筆者はその後札幌市を離れて熱帯のスリランカに赴任し，熱帯の水田に我が物顔で繁茂するのを見て，熱帯から北緯 42 度まで稲作に伴ってきたコナギの執念を感じた（図 -4）。

原先生は 1985 年 3 月に短期大学を退職されて札幌市に居を移され，ほぼ同時に結成された「北海道植物友の会」の副会長として札幌近郊をはじめとする植物の調査研究と市民への知識普及に尽力されたが，1995 年 11 月に享年 78 歳で逝去された。「北海道植物友の会」の会報は「菩多尼訶」で，江戸時代後期の宇田川榕庵がラテン語の botanica に日本語をあてた植物学書「菩多尼訶経（1822）」に由来する。

原先生の経歴と業績は，「菩多尼訶 12 原先生特別追悼号（1996）」に詳しい（参考 http://www.asahi-net.or.jp/~KC7M-MZSM/bota12/bota_12.htm）。また，1917 年に現在の川崎市多摩区の農家の 6 人兄弟の末っ子に生まれ，少年

図 -1　代表的な水田の一年生広葉雑草、本州以南のコナギ（左）と北海道のミズアオイ（右）

図 -2　北海道の植物や雑草の新知見を提供した「北海道植物図鑑（噴火湾社）」

図 -3　北海道伊達市産コナギ（右）と埼玉県鴻巣産コナギ（左）の着花の違い：札幌市で栽培

図 -4　熱帯のスリランカで出会った水田雑草コナギ

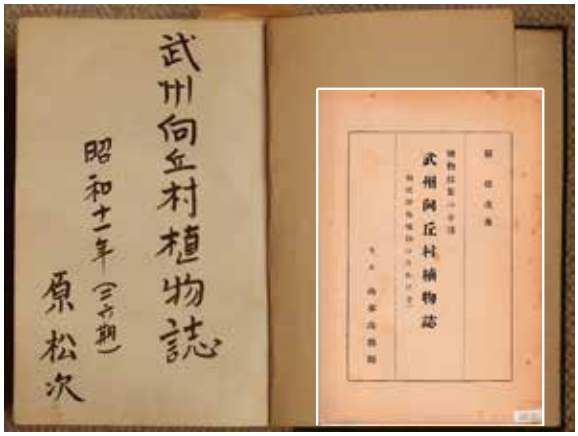

図 -5　原松次先生の東京府立園藝学校卒業論文の刊本（前）と稿本（後）

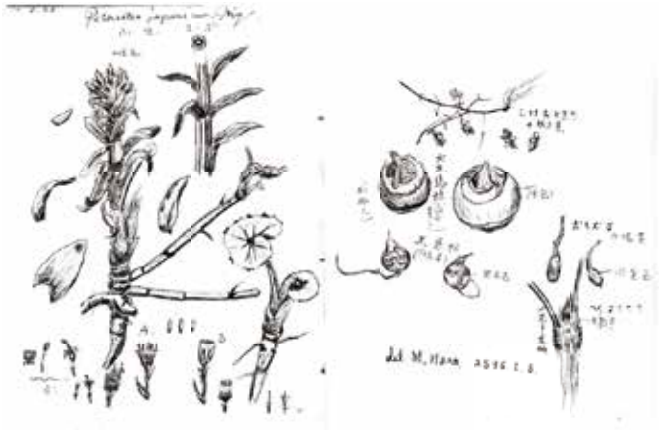

図 -6　「武州向丘村植物誌（稿本）」の植物図から「ふき（路傍植物之部）」（左）と「こけおとぎりの越冬芽・黒滋姑・おもだかの塊茎・へらおもだかの新芽（池川植物之部）」（右）

～青年時代に牧野富太郎博士の指導を受け，北海道に渡ってから，いぶり植物友の会を主宰し，前出の「北海道植物図鑑（1981 ～ 1985　図 -2）」の出版までの，植物との付き合いをご自身で語った「植物にとりつかれて―自然観察の手引きとして―（北海道の自然と生物 1，1989）」がある。

さらに，「菩多尼訶 12」に紹介されていない原先生の著作として，A5 判，45 頁＋ 5 頁の「植物採集の手引き　武州向丘村植物誌（類似野外植物のみわけ方）（1936）」があって，神奈川県の植物に関する古い文献としてしばしば引用される（以下「刊本」 図 -5 前）。「序」には，

「著者原松次君は自ら號を愛草人と稱する程にして植物の鑑定に明く，東京府立園藝学校に在學中，既に知名の植物愛好家に知らる。（中略）同君の卒業に際し提出せる論文二冊，（一冊は向丘植物目録にして調査せる植物一千二百種）の内一冊植物誌を多数の精密なる同君の寫生圖を割愛し，記事のみを茲に印刷に附し，青少年の植物愛好者の参考として同君の許可を得て發刊せり。」

と「東京府立園藝学校博物標本室　梅野博次郎」氏による刊行の経緯が記されている。「武州向丘村」は現在の神奈川県川崎市多摩区の小田急小田原線向ヶ丘遊園駅の周辺で原先生の故郷，「府立園藝学校」は現在の東京都立園芸高等学校のことである。

背表紙に「武州向丘村植物誌　第廿六期卒業論文　原　松次」と書かれ，B4 判，縦書きの罫紙を袋とじにして手書きの本文 188 頁に，B5 判の画用紙で 48 枚の植物のペン画（うち，25 枚は両面を使用したため，全 73 図）を挿入した冊子が，「多数の精密なる寫生圖」を含む「卒業に際し提出せる･･･植物誌」にあたるものと思われる（以下「稿本」図 -5 後）。

「刊本」では，「稿本」の「緒言」と「前言」を合わせ，かなりの部分を省略して「はしがき」とし，巻末に「植物雑感（府立園藝学校校友會雑誌第 41 號所載）」と「索引」が加えられた。「稿本」での「梅野先生など諸先生への謝辞」は省略され，この部分の欄外には鉛筆で「不用」と書かれているので，この冊子が印刷に使われたことが伺われる。「刊本」では本文も多少変更され，「池川植物之部」のコナギでは以下のようである。

「稿本」　こ（古）なぎ　みずあふひ科

水田中に生ず．其の葉が幾分「竹柏」に似てゐるからか．
葉に廣狭あり．其の生へ始めは，狭く線形である．次第，巾廣き葉を出すのである．枝梢に，軸を抽き，紫色花をつける．花蕋の状態面白い．果となるや，軸曲りて，下向する．

「刊本」　コナギ（みずあふひ科）

水田中に生じてゐる。葉には廣狭がある。その生へ始めは狭く線形である。次第に巾廣い葉を出す。枝梢に軸を抽き紫色花をつける．花蕋の状態面白い果を結ぶと軸が曲つて下向する。

植物のペン画は精密かつ立体感にあふれた立派なもので，「ふき（路傍植物之部）」と「黒滋姑･おもだかの塊茎など（池川植物之部）」をここに転載した（図 -6）。図では，1 枚に複数の植物が描かれる場合もあり，それらの 65 点に（昭和）10.2.24 から（皇紀）2596（=1936）.1.5 までの日付がある。68 点のうち，3 月に 32 点，4 月に 20 点を描き，4 月 15 日には 1 枚物を 10 点作製している一方，5，6，10 月にはゼロである。昭和 10（1935）年の冬から春にかけて描画に集中したことが分かるが，「稿本」での「山地植物之部」の最後，「たうげしば」の説明の次にその理由が書かれている。

「私の觀察したのは，毎年冬季であるが故に，春，夏，秋，をおろそかにしてゐるので，觀察不十分の点が多々あり，今後研究したら，面白い結果が現はれることだらう．」

夏から秋にかけての時期には，牧野富太郎博士の指導の下で東京植物同好会の採集会への参加で多忙だったのであろう。

原松次先生ご自身の「植物にとりつかれて」にも，卒業論文とその刊本には触れられていない。「稿本」は学校に提出されて先生のもとに戻らなかったのであれば，それが原因かもしれない。なお，原先生は「北海道植物友の会」に尽力されたが，1937 年に結成された「北海道植物研究會」の会報「蝦夷雑記」の第一號（1938）と第二號（1941）の会員名簿に「原松次」とある。太平洋戦争の始まる時期の「北海道植物研究會」について原先生にお尋ねしたところ，「名簿に名前のあることを含めて全く記憶にない。」とのことであった。